



子どもの本から

父の記憶を集めめた物語

皆川美恵子

一九〇〇年、あるユダヤ人家族が迫害を逃れるために、帝政ロシアからアメリカ合衆国に渡りました。カナダ国境に近いミネソタ州ダルースで、家族

は生活を開始していきますが、一九一八年、死者を数多く出しながらインフルエンザが猛威をふるつて大流行します。五人の子どもを抱えた夫婦は、マー

ベンという一人の男の子だけでも生き延びさせ、新天地で根づいていってほしいと、ある決断をしました。カナダ国境に近いミネソタ州ダルースで、家族

十歳のマーベンを、インフルエンザが伝染しようもないような、森林が果てしなく続く北の地へ避難させたのです。父の友人が木材の伐採の仕事をして

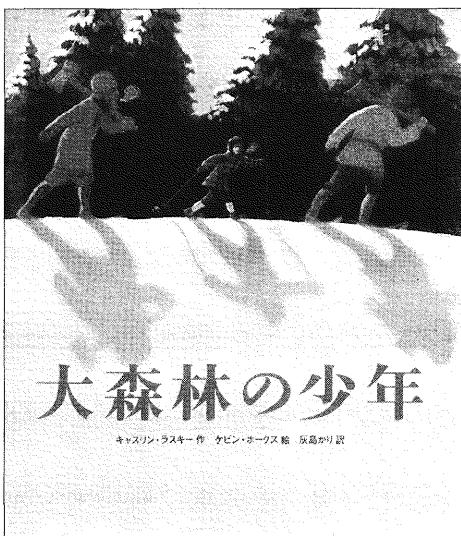
いました。その伐採現場へ、マーベンを送り込んだのです。それもマーベンがある仕事をするために。一体、十歳の子どもが何の仕事ができるというのでしょうか。マーベンが計算が得意ということを知っている父は、帳簿係の仕事ができると判断したのです。

マーベンは母親に、父親の古いオーバーを仕立て直してもらい、裏にはビーバーの毛皮をつけてもらいます。また、耳あてのついた帽子も作ってもらいました。別れの駅でマーベンは、父親から六歳の時にプレゼントされた、父手作りのスキーを手渡されます。大森林へと向かうこれから旅は、汽車に五時間乗り、到着した駅からはさらに八キロの道を、スキーで滑つて行かなければならないからです。

地平線に森の黒い筋が見えるだけの、まっ白い世界に一人降り立ち、マーベンはスキーで森を目指します。星が輝き出す夕暮れ時、やっと伐採現場にたどり着くことができました。マーベンの仕事は、き

こり達が伐った木材の伝票を整理して帳簿につけることでした。そしてもうひとつ、朝寝坊をしている、きこりのジャン・ルイを起こすことでした。力ナダから木を伐るために来ているきこり達は、フラ

◀『大森林の少年』キャスリン・ラスキー作
ケビン・ホーケス絵 灰島かり訳
あすなろ書房 一九九九年



ンス系の人達で、ジャン・ルイは、最もたくさん木

を伐る、最も身体の大きい森の巨人でした。

フランス語を話し、フランスの歌や踊り、そしてゲームで遊ぶ、荒らくれ男たち。食事は、ユダヤ料理（豚肉類を決して食べない）とは、まるで違う食べ物。町の生活、家での生活とは何もかもかけ離れている森の生活に、マーベンは少しずつ慣れ親しんでいきます。仕事も早く片付けられるようになると、マーベンはスキーで森へ出かけ、冬の森の静けさの中に浸り、安らぎを覚えていきます。

やがて四か月が経過した頃、雪が解け出しました。雪が残っているうちに、スキーで帰らなくてはなりません。マーベンとすっかり仲良しになつた森の英雄、ジャン・ルイは、刃が輝き、柄は蜂蜜色に磨かれた斧をマーベンにプレゼントしました。そして駅までの道を送つてくれたのです。

こうして斧をかついで家路につくのですが、家族は誰一人欠けることなく、互いに抱き合つて再会を

歓び合うことができました。

十歳のマーベンは大人になり、やがて父親となつて、自分の体験した森での生活を子どもに物語りました。マーベンの娘、キヤスリンが、この絵本の作者なのです。マーベンは、子ども時代の鮮烈な記憶を熱く語つたことでしょう。ロシア、アメリカ、カナダ、フランスとさまざまな文化を背景にした人々が、国境を越えて生き抜いている厳しい姿は、子どもだったマーベンの眼に、人生の真剣さを写し出したことでしょう。一人スキーで雪原を滑り、言葉の通じない中で、仕事をしながら生活をしたマーベンは、大人を見習いながら真剣さを身をもつて実践していたのでしょう。

ところで、比較文学者として著名なエドワード・ザイードは、異文化をもつ人々と真に共存するための夢のモデルとして、“記憶の銀行”を提示しています。公共の図書館さえも持たない小さな民族の、沈黙させられ、散逸した記憶を集め、記憶の銀行を



▲「だれも死んでない」マーベンはそっとくり返した。
「病気は、終わったの」母さんが言った。「そうして、うちの息子がやっと帰ってきたわ！」

つくることだというのです。そして集められた記憶を誰もが利用できる共有の財産にしていけば「地球の文化の本当の豊かさや歴史の多様性を知ることができる」と述べています。

この絵本は、ユダヤ民族の、ある家族の記憶の物語です。父親が語る物語を聞いて育った娘は、父の記憶を自分の記憶としても定着を果たしています。

私には、父の記憶を大切に保持する子どものあり方が、何とも温かく、ユダヤの家族文化のきらめく財宝を垣間見たような驚きを感じました。そして、このような美しい絵本として形が誕生した時、地球上の私達すべての記憶として共有されることを、しみじみと実感するのです。

(舞々同人)